新局玉石童子訓

へ 遠13
1279
18

村田

新局玉石童子訓巻之二上冊

東都　曲亭主人口授編次

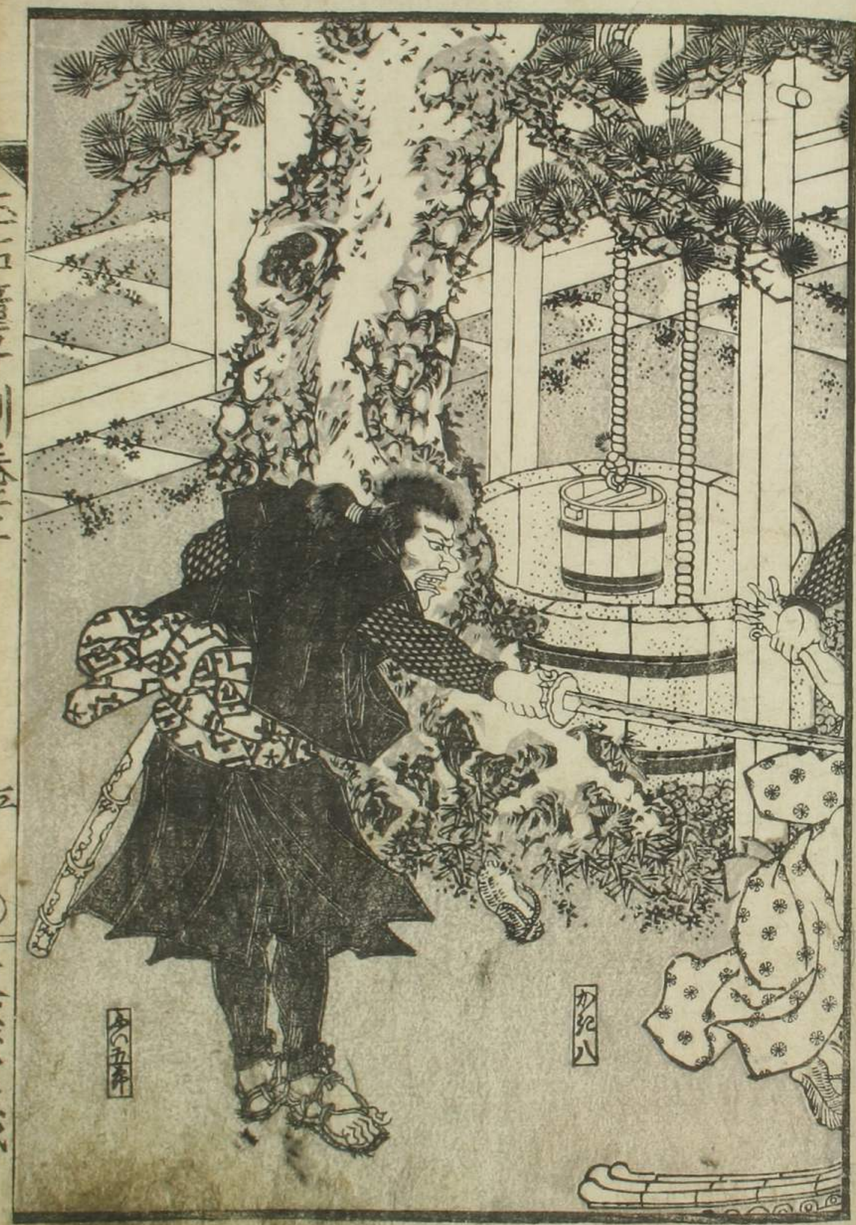
第二十二回　冤隙を鑽て二賊夜師徒を脅す　生口を呈して両少年疑獄を解く

再説。大江杜四郎成勝。峯張楽六郎通能。料らずも柿八が話説を。事ゝ便宜と聞てけれ。先住吉の故老们ゝ。這義を告てちろるさをそ。明日は大和へ起行ぶそ。是日黄昏の比及より。主僕編笠を戴て。倶ゝ孟林寺を立出るゝ折ゝ六月中旬ゝそ。昼ゝ酷暑ゝ堪かたくるも。夜ゝ涼しく反て路天ゝ晴て月清く隈なく貌る馬追ゝ鄰虫鳴く音ゝ人の望送らそ。路の去向の草蒸暑冷てゝ處幻響ゝ一雨妾時絶ても堪ぐるに憂ゝ浮世の哀愛苦労。早稲の葉垂も短夜の深程ゝとゝそけり。然れゝ又去の宵孟林寺の住持木去ゝ大江峯張両少年ゝ僕の任

1279
18

吉へそ出くやきーとろ必久ーからぎーて。かりるべーと思ひ。奴。梵僕柿八ふ吩咐て。既ふ前門ハ鎖せども。角門ハ閉しるのこを。丹を打せぎ。他ものかへり来て敲ぎるぐ。疾開て入れよとられーか。柿八則ちろ。已ゞ小子舎の窓推開ぎて。蚊退火を。ぢて月を燭ふ明日起ぎの用意ふ。脚絆雨衣合み領ふ。ぢの紉縫ひ草鞋の緒を融ーぐどろ。睡らで両個の少年を俟ふ短夜ぐれい。丙夜闌て既ふ亥中ふるりぬれと。他ものいまぐ。かりの来ぎいふく。と思ふのこ。果敢ぐ打胞を催ーて。寐とる知らぎ在りー程子二刻時候ふろり思べー。折ろ人の礙々と。角門を敲く音を。柿八宿耳ふちぢて。是必青年達のかりの来ふけり。と思ひーぐ。一聲高く應と。合て遽ーく身を起ぎて。板金圓を榜りとぢて。足ふ曳穿外ふ出て。刀袷们還りゆひ。狭と問て。聽く角門の鍵鎖をやをり外ーて。開くを遅ーと。外面より。突然と。我と入る者あり。四郎茶六主僕ふ。あらで。小阜の像ぢ。両個の襠巡兒身の材五尺八九寸。混淆ある。廣袖の單衣を。裙短ふ被做ーたる。圓括の帯尻高ふ。紈結ひ。那腰ぢ。銅鞘巻ある。山刀の。二尺七八寸許ある。を。璫下りふ。挿做て。重裡る草鞋を。紐短ふ穿くりける。面魂の鬼魅ぢ。紆蚰蚓ぢ。思ふ。圓ふ眼。赫赤火一對の威勢。當るべくもあらねバ。柿八。を。吐嗟ぢ。かりふ。叫んとぢるふ。聲。立ぢ。逃んとせーを。一個の強盗。走蒐りる。項髪を。掻抓み。揉仆ぢ。背を。踏へて。動ぜぢ。這奴。倘聲を立るべ。只一刺ふ。息の音留んと。豆光哩と。引抜く刃の光ふ。眼を。射られ。柿八。を。更ふ。生くる心地ぜぢ。許ゆとふ。聲も。脱歯ふ。漏て。粥るぢを。然もこそあらめと。蹴返せバ。一個の強盗。立替りて。起んと。蠢く。柿八。を。起ーて。果ぢ。両ゆと。捉て。腰る。麻索。掖ぢーて。最も。緊ーく。結掇け。當下又一個の強盗ハ。柿八ふ。ちぢ向ひて。やれ。老老。兒命惜くハ。住持の臥房へ。案内をせよ。然るぢ。ハ。ぢら。頭を。掉らバ。其首。即坐ふ。斃ぢ。落さえ。蚓く。立ね。と。推立ぢれバ。柿八。を。事の勢ひ。従ハざるを。ぢ。阿容々々と。先ふ。立て。引て。住持の便室ふ。至るふ。件の両個の強盗ハ。

角門を開けて柿八二賊
お綿らを


お五郎
加紀八

引提一双を鞘に納めて、含笑みぐゝ迹に跟間に二間の坐席を過て燈火見ゆる垂蜷の臥房の邊へ近つく程に所化子舍に臥こゝける両個の沙弥に驚き覚て、来ぬるに誰そと問せも果ぎ一個の強盗刀を抜て、蜷の吊緒を斫落せばいふく噪ぐ両個の沙弥等に盗見入りぬと稍知そ逃躯れまく欲れども、蜷に那身絨包まれて、紐羅の鶉に異ならぬ。彼も夏野の草枕夢ふるれとも念ずたる程も、あらせぬ強盗に甲乙俱に膂力に任せて、沙弥等を惨刻蹂躙れば憐むべき両個の沙弥に叫んとまるに息絶て死活に知らぬ做らふけり。小程に木玄道徳に四郎茶六がかゝると俟て睡りもとゞせで在りけるに小夜深る隨に堪がたき蚊のヨヲければ蜷帳に入りて、躯く枕に就て自心に懸れば宿も寝られぬ既に夜ふく闌て子の時ぞと思ふ比盗見や入りけん。平ならぬ物の响所化子舍のかなたこなたに驚たるんと思ふ比盗見や入りけん。平ならぬ物の响所化子舍のかなたこなたに驚たるぐゝ敢噪ぐぬ躯て悄地に蜷帳を出て吊緒を解ぐゝ燈の燈心を増掻起て

蒲団小延掻遣ゝ跂坐して徐に数珠爪繰て念佛を唱ける程に既に夜ふく両個の強盗に聖音高く找て近つく住持の臥房に思ふも似ぬ一個の法師怕ゝ色ゝ。端然として在りければ駭る蒐らんいさもゝ俱に刃を引提て金剛神の暴たる像く。雙立て疾視ゝ。有徳ゝ程に大江峯張両少主僕に甲夜に住吉の里に造ゝ故老ゝの宿所を訪ふに他に里長許赴ゝ遠ゝ。と云ゝ只得還ると俟程に憶ふに似ぬ小夜深て遂に丑中の時候に及て其人かゝ来ふければ則事の便宜を出て云云と相譚ふに夏の夜ゝ短く子の時近くゝ。ゝ遽く辭去ゝ明日に早天に大和路へ起ゝの准備に為ゝ。這頭に小衣に深き鈍ゝ刀を共伴に咲ゝ路次を急ぎて寸二刻ゝ。と思ふ時候俱に寺へ入ゝ来ぬ。と見れば角門に閉ゝてあり。真夜半ふ忘れる狭柿八ゝ歳老かひゝく最鳥滸ん。と思ふのに鎖せぬれば敲ふ及ぬ。主

僕らそーく内に入るに庵漏の戸も亦開けてあれば俱に訝りあるに弁ず儘に我と
入るに庵漏中房所化子舎まで燈火滅て黒白と分ぎ只奥のかくに丁りて耳熟
れぬ人の聲音を罵るごく守えーべらく訝る四郎楽六原来強盗入るるけん。
師父の上心許ず慌りて行心あるるるる。と呻ぎ呻れて共侶に袴紐を
結ぶ單衣の袖巻返して刀の拵甘る准備も俱に精悍く熟て間隙迷
ふとるく。竊歩まて二間の坐席を過て声まる奥のかくに住持の便室に近づ
けり是より先に両個の強盗に住持木玄ふるに向とてやをれ坊主落着貌まる
今戦国の習俗を弱に強に征せれ。小に大に併らる。あの義に拠て俺们も人を屠
て東西を畧る山豪栄曜に誇りしも一向に造化ずくて。獲にあらぬ銭竭た
れば今宵和尚に借んと思て白刃で推参まるに銭まれ金まれある涯ら出と
夙くいるるぎやと両聲尖く責嚇ぎと木玄怕るる氣色るく念珠を止めて答る

ぎ。和郎ぎる偶まれども開に見る所の錯るに當寺に素より寒院ゆく。檀
越坊料まからぎ況今戦世の在俗に残忍不仁るらぬに稀ぎ。塔を供養に法
師に布施まる善男善女あるとず。然るを何ぞの餘財をもて。和主ぎに取ん
やとのぎも果ぎ甲乙両個の強盗に又聲苛立て嗜ぎ老狸奴ぎ縦術よくぐ
瞞るとも昨日も今日も俺们ぐ昼悄地に来ぎ覘知る本堂の光景阿弥陀の
俗客殿の席蔦障子まで多の届ぎる造作結構敗銭經紀に見せるとも。
銭ぎ寺と誰らぐ詩も語も入らぎ疾身を起して財庫へ案内をせよ弁を
猶惑て不の字とらぐ這巨刀ぎ引導渡さんにふたやくと刃を席蔦へ衝
立徹立俱に睨へ嗜れども木玄噪ぐ推禁めて小架棚より合る出と如衣紗袋の
鎖を開て圓金五両を捞出るに又強盗ぎ向て和郎ぎらだら譴るとも是
より外に金子はるー。是のて赦れと投與るに強盗ぎはよくも見ぎ怒まる両聲又震

立く這奴究て胆大し。強情張て時を移して天を明さまく欲せるとも。虚々とうく其
術を喫んや。今いまも鏡しがごろ。觀念せよと左右齊一刃を見光哩と震抗る那
時遲し。這時速し。背後ゆ覘ふ両少年。四郎茶六両聲ゆ盗児等と呼禁ぬ。
驚き見かる両個の強盗敵ふい數ゆ足らぬ少年るを侮りて就鳥の兎を鷙
る像く。蚓く踵を旋して撃んと競ふを四郎茶六相迎て物ともせず。引外ぬて共
倡ふ拔合しる刀の電光丁々柝地と殺締ぶ修煉の刀尖梳とるく。岌より蒐る勢
ゆ強盗ぬらい胆落て受刀ゆのを做しかば甲乙ともゆ浅痍を負ふて流る鮮血ゆ大刀
筋乱れて竟ゆ怵べき引外して逃んとるを毫も透さず大喝一聲。両少年ぬ武勇も
對の剽姚ゆ二賊い刃を撃る落されて怯むを汲とり主僕のる緞俱ゆ刀の背撃ゆ
窮所を撲地と撃しかば二賊い苦と叫びも果ぎ身を轉して仆れけり。當下木玄道
徳い憶ぎヤヤと声を被て扇子を開ぎて両少年をうち扇ぎて誉てぬ思ふ

優しる。和殿らの武藝剽姚然しも猛る這奴らを殺ぎ仆しを出
家人しる俺本意ゆ相稱ぬを最愛し。然しとも由断ぎるぬ陽滅るぬ逃
のやせん蚓くる脚を拔らぎやと。心屬れば両少年い応ぎて左見右見て。強盗毎
ぬ腰ゆ夾ミし。麻索あるを拔合して甲乙俱ゆ曳起ぎゆ二賊い窮所を中られぬ。
半死半生ぬを身を動しるぬ。當下四郎茶六ぬ躍て件の麻索をもて思ふの隨ゆ
二賊を結扭て且檐廓ぬる障子を開ぎて背合ゆ真柱へ圍々巻ゆ縢着しかば。
木乎ぬち見い合ぬ笑てぬれでとを安堵ぬれ和殿們い何ぬの故ゆ那里で小夜を深し
なる。倘一歩遲らせば俺身い非業ゆ命を果さん好造化でありけるよとらひて長く
肱を伸して件の金子を撥合して又架沙衣笥へ藏れば四郎茶六ぬ合ぬ住吉
まで遠くもあらぬゆ今まぬ還らぬ。と訝りぬい理りぬ俺們主僕甲夜の間ゆ
故老許ぬ。しるゆ水田の樋を修復ふるして里長許参會あり召れて那里へ

成勝通能
雙て二賊
を生拘る
多六
多五郎

多四郎

なりとゝふ只得屋主人の還るを俟と二時有餘是等の故ふ小夜深て所用を果
さゞる稍方便かなり来れば不慮の賊難師父ふ傷損のなりゝ是切ても幸なり
所化達も柿八もいふ做りけん心許なりゝ知らせやと問い本玄然バとよ他
們が上い酒家も沼知らぬ疾紙燭と見ゆるぞやと柴六ふ云て蠟燭ふ火点
穆しゝふ燭を秉て先ふ立バ杜四郎も共侶ふ刀を引提て出て見る次の間ふ壁際ふ
結扭て俯ーたる者あり是則柿八火光を見て頭を抬げ腋児よ咱等を救ひ
の之と叫べ四郎柴六ふ燭を抗て得と見て歩斬や是も強盗の所為なるべーと慰
めて躯く其索を解捨れば柿八ふ先腕を摩り腰を敲き膝折布て却強盗ふ
結扭れて只得寮内ふ立られて這一室ふ来ぬる程ふ果い蹴られく仆きけふ首
尾を報ーかバ木玄も是を聞て俱ふ所化子全ふ出て見るふ両個の沙弥も死ふ至
らぬ御高ふ他等い強盗ふ蜘の吊緒を斫落されて剰酷く蹂れかバ一旦氣絶ス

たれども俱ふ窮所ふあらざれバ姑且ーて息出く那身ふ恙なけれども又只物のお
もさふ出ぬるやらぬ在りとふ事の趣を出ーかバ果い四郎も柴六も住持も絶ぬ腹を
抱て俱ふ無異をぞ歎びけゝふ程ふ柿八ふ密ふ女倉柴折焼て茶を煮て四郎柴
六と木玄ふ夜饌を薦めるぞ。左右する程ふ暁天ふ做りー比件の両個の強盗ふ
やう屋くふ息出く氣力ハ我ふ復ーかども刀瘡痛て堪がさけれバ俱ふ頭を低て在り
當下峯張柴六らうち見て呵々と冷笑て虎狼も檻ふ入りてふ人ふ命を乞ざる者
ゝ。やをれ強盗毋其身ふ做りーハ積悪の報ゝらんを思い知るや姓名出処を文當黒
まで招了ーて死ふ就ぬやとゝふ云て両個の強盗ハ頭を抬げ眼を睜りて這頑童奴
何をふや咱等い名も云ん山家ゝらねど運盡て乳の臭失ざる若们ふ戰ひ負べ然
搞ふ做りたりとも招了ぬ口ハ沼の宝。烏滸をゝらひそと罵れバ柴六怒く扇
子を含て撻懲さんとて身を起ぬを杜四郎推禁めて徐ふ二賊ふうち向ひて耳

きて諭さやう。今戦國の習俗を。武士なる者も糧竭れば。喝馬前陣に倣る者あり。和郎等も亦其儔るべし。されども法度を犯して。悪を做す者を律令の所刑戮せざるを。ゆるさ。あるとて天も明バ國の守の廳へ牽べ。されども這道場より罪人を出さんや。實に已をゆるさるの。非如和主等免れずして頭を法度に喪ふとも我们必師父に請て其遺迹を吊ひ出させん。姓名出処を具に告よとらんバ木丟も俱に云やう四郎の理言俺意に稱へ慈悲に阿弥陀の本願るふ幸にして東西を畧られぎ俺さへ沙弥さへ一人として傷損さつる者あるとるけれども。その儘に和郎等を饒して放遣まく欲けれども。這義を守に許ぶ。後難も亦料りがたし。俺自由をゆるさる所法度に憑ぶあるべ。その故に是る少年大江杜四郎成勝ばかりなる如く。和郎等免れがたて死刑に其身を終るとあらば。俺既も授け。墓碑を建て永久菩提を修しゆるせん。其名を問へ這所以なりと諭せば峯張楽六も悟りて膝を打鳴らして。尓也々々。俺徳ちの威をのて携向せまくあるへ倒に盗るる山の刀称達腹とる立て慚愧々々と慰まバ両個の強盗ちきく。尓にるまバ告ざらんや。先這索を緩めてよとのに楽六心ゆく巻くる索を解復しつ。両人と饒さそ推居まバ一個の強盗陳じていやう。現に強弓も其強斬る時あり最小の鍼も刺ずとなる。俺心を和る両少年の文武才幹和尚の慈悲を喪いつくゆるぶ。俺们も亦人なり既に諭を美ぬまバ今はらにぶ已んや。咱等両個は世に知らまくる鐵屑鍛冶郎が支黨を俺は則低杭駝鳥太又是なるる。狸毛吹五郎と喚做されて去歳より頭領鐵屑に相従ふく周防る山口城下に在り又煉金の騙りく人を揣らまく欲ふ。其事厳く發覚れて討隊の士卒向ふ一霎時に防ぐ戰ふりのから終に大刀折と勢力竭て頭領鐵屑に搦捕られ俺们両個に虎口を脱まく。便船をゆく浪速に

歌店を求めく潜びく居たとのべ吹五郎其語と續ぎく。然び又俺頭領の情熟の土妓ふ今様と喚做きあり。他の人ふ知らまくる。乳守る浮世袋屋の名妓ゆそありけるふ過世ありてや鐵屑と相狎ーとりこの年東暢路の數累りく相愛きほの多魚水の如く死をりく拉言ふ妹伏ふあるまび鐵屑遂ゆる秘密を告く。那煉金の術と做きふ他を媒鳥ふ使ふあり其折ふ浮世袋屋の主人ふヨヌく閨房金を取らせく。他ぶ両個の小三板きぐ。或ハ三月小半年相携りく他郷ふ遊時今様を小槌と喚做ーー又那両個の小三板を丁児打出と喚做去ぬ。然れば去歳の九月ふ頭領西へ赴く折今様ゆ別きを惜ーく幾日も放難たりーと。俺们屢是を諫めく竟ふ袂を分ちゆたとりくべ駝鳥大又ふ中ふ然び又咱ゆ両個ぶ周防より脱き来く。潜びく浪速ふ居程ふ坐して啖へば箱も空ーく盤纏既ふ竭ーかぶいくぶ那今様ふ此の銭を借んと思ひて豫

相識る君ゆ且ぶ往る立月の厶の宵ふ咱ゆ浮世袋屋へ赴くく初會の客ゆふ面色赤ぬく。當晩今様ふ逢ふをを泣く。小夜深け人定りく却周防ゆくありー事。鐵屑捕らまーかぶ。竟ふ死刑ふ處せらるべ那折俺身ゆ吹五郎と倶ふ這地ふ来るーと送もなく咽き告く。路費の資助を乞求るふ今様ゆ空も泣果ぶ流ふく涙ゆ泉の如く終夜泣明ぬーかぶ。俺も困ーぐ睡ることを泣ぶ其明旦別きふ臨ーく。今様涙を止めくふ中ふ憑ぶきせのふ路費のゆへゆ。ゆくゆく伝まとも。目今ゆ整がくゆ。後ふ必使をのく。御歌店へ齎ーてんとふふ咱ゆふ欺び兼て。俺隠處と坊名と屋主の名を咽き告く。後便を契ぶーふ果ーて其日の瞑昏ふ今様ゆ約束違へぶ一個の密使をのく。贈ふーけふ消息あり。其書甫ふ斂めくふ圓金十枚と一撮の雲髪戎

裏添くあり〜ぬる。則是を受食りく。然氣もなく使炊を返〜ん。其後宿の閑室わく。吹五郎と共倶ふ其消息を聞まるふ。其文其書れ美〜げゆく。俺们ゞ知所あらねと。寫連ゆ〜ふ事の趣を哀〜かくぎとふことなく。鍛冶主世を去りぬひるゞ。誰を所依ふ苦海の湍ふ猶立くあゞらん。有斯る浮世ふもみ染のあまふるべよりもなく果敢あかりけふ一葉の船。槽焦ぎまくて死あんのこ。單殘てく世ゆ在らゞ。竟ゆゑ那秘事を人ふ知らまく俺身さら召捕らるゆあらゞ恩あくく怨るき。親方ちゞも連累の罪免まがさくやあらむぎらん。袷とらひ恰とらひ。既ふ覚期を極め佇り。聊ゑゞら御約束の茶靡花十枚ちゞふ。紀念料とも見ぬひ孫又ちの黒髪い奴ゞ髻結の梢ふ佇らひ。紀の高野の御山へ斂めぬゞ後の世ゆ苦を免るくりもやあらん憑ちまゆらちふふのゆのこ。あるかーこ。とありーかゞ閑れく悔〜死鬼百合を。露の涙ふ堪ざりーと。巻復〜く二ちびハ見ゞ。只其金子と有負人と。做〜ていく潜びく居て。とひ人ゞ吹五郎語を次く。ちふふふ其夜のゆふふべ。件の小槌の今様ゑ。自汲〜て亡あれ。と人の噂ふ吟えてかゞ驚れもあつ不便ゑまとも。那身既ふ在らゞ。做てゑゞ。俺们両個を鐵屑ゞ。支黨ゑりと知者ゑく。人の口より洩ゑくとあらゞ。と思ハバ倒ふ憚らゞ後安くて日を弥る程ふ那十金も房賃と酒肉賭博ふ使果〜く。せえ術のゑ隨ふ舊癖發らざふとを沼ゞ。這孟林寺ハ先住より。倹約をのこ宗とちゑまとハ。編院ゑまとも。銭あり。と人の噂ふ知〜く。熟〜今宵の暴挿ぎ。事十二分ゑりけまハ。造化精妙。ちふ。鈍や和郎ゞふ雌伏せらまく。復生べくも思ハねハ今ちふの世の遺

裏に有り実事を吐盡しく。和郎爲の後々ちぐの夜話
種に做せるのく是ぞ満腹あさらんぞと辯に誘る乙人も慈悲と礼
儀に勝りもるき招了備りけるべ四郎柒六の欽びいはらん木丟
も言意表に出く。一霎時嗟嘆の聲を発てぞ。少果く二賊に向ひて。
汝が如き那今様が。鍛冶郎を乙人と。知りて俱に相愛して他が
哄騙の媒鳥にさへ做りく其悪を幇助しへ是情慾の惑ひぞ。
竟にみづく双に伏ちーへ他天四訓の免まぬ所憎むべく憐むべ。遊
莫人の懺悔ある。五逆十悪も滅るるーあり。然べ汝爲の菩提へさらり。
他が剪く髪頭髻の梢も。俺必廻向して。蓮華王院へ斂てん其黒
髪いに示ある。と問ぞ駝鳥太谷くに。開き辱く美りぬ今様が
贈とく。金子こそ使ひ果ーたなと。其書殼と黒髪と。焼却んも

さもがゆく。今も俺懐るに。勒肚に藏めく在り。疑ーくに食ひしく。
見らにくともけあらうもあらぢ。とに示に歡ぶ四郎柒六共侶に身を起
あく。駝鳥太の懐へ手を指入まく搔捞るに。果ーく勒肚ありけれ。
締を解れく曳出しく。見まぞ書簡と黒髪あり。俱に其書簡を
讀見るに。今這二賊のに所。詭譎るらぬを知るに足る。既に明證と
ぬくけまべ。意外の怡悅に勝ざりけに。四郎に二賊にうち向ひく。汝爲
懺悔のあるりく。其に所照据あり。汝両個が身を殺ーく。罪なき
男女四名まぐく死を免るく由あまぢ。其積悪に憎むべく。言の懺悔に
賞まべ。汝もあらん今様が。自殺の夜廿人初會の客るに大和の
旅客朱之介と喚做を壯佼る。分説建ぞ禁獄せーまく。剩鐵
屑鍛冶郎の支黨るべ。と疑に。這故に朱之介を宿あくに。十

三屋九四郎の逆旅の留守る所。渾家と両個の乾児之連累せら
れく。今も猶囚牢ふ在り。とゝへば柒六も俱ふ為ふ。其九四郎ハ俺兄
る。りまぐ安藝より還られども。嫂乾児の寃屈の罪と救ふ由る一
日も安心のるりーふ。時る哉料らぎも汝等両個の照児を引く
けふ。日屬念ずる神明佛陀の靈應利益あそあらむもらん。陣
館へ牽る折。言と違へぎ招るもるやとらるまく駝鳥太吹五郎ハ面を
注ー嘆息ーく。其解屍人の事ハ為も風聲ふよりの喫ざ事なり。
然ーも寃屈の分説達らぐ。皆其首と喪ひ。是俺们ぐ身代ゆく。
ゆく後安る所べー。と思ひーハ虚負ゆく。反く咱等ぐ其男女と救ふ
奇貨ふせら所る。造化の小児の所為る狄天の網とそ漏がされ。不
思議ゝ々々。とだりふ。呆まく又ふりもるー。當下峯張柒六ら。今

様の書簡と黒髪を。分ちて自畀紙ふ推裹まく。却木丞ふ呈覧まれば。
木丞則其黒髪を受含まく。書簡をば柒六ふかへーけり。左右まる程ふ
茂林を離る鴉の聲ーて。天ハ夙く明ーかど。杜四郎も柒六も。乙藝ふ
救ひ含るべき照据の二賊を獲てけまば。今ぢら大和へ起行ふ及ま先住
吉る所里長故老ふ這義を告く。出訴の准備をいそぐとそ。俱ふ
庵淵へ退けば既ゆく柿八る。早飯と炊ひ果て。先這両個の少年ふ
薦めく出ー遣まくま。早飯果く柒六ら。住吉へ赴行。杜四郎ハ又
駝鳥太吹五郎ゞ。招るの條々を。告文ふ寫さんとく。料紙硯と推乃て
單所化子舎ふ在り。又住持木丞ら柿八ふ吟味く。大ひやらの所握
飯ふ。焼塩を塗らーく。郷りー儘る駝鳥太と吹五郎ふ喫せゆ。
ちも亦出家の慈悲る所べー。尓程ふ。六の日已の比及ふ峯張柒六郎通

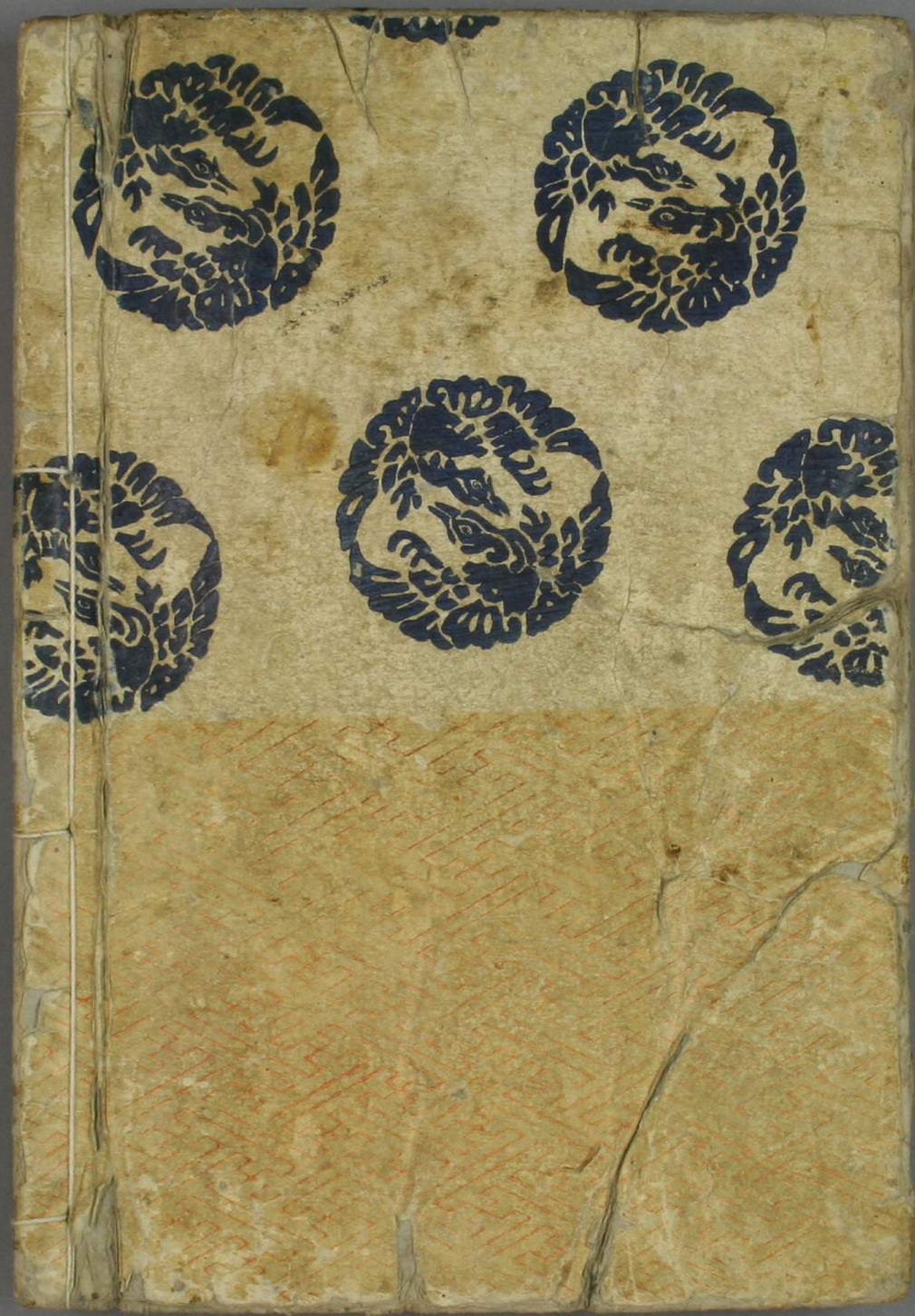
能い。住吉の里長故老と。十二屋の近隣る。里人櫛工們を招て孟林寺ふかへり来ふければ。木工則召入れく。杜四郎と俱ふ對面を。登時里長故老ものハ四郎柴六の武勇大功を相祝し。且乙藝ものを救ふべく告愬の一義を商量しく。陣館へ訟人へ。則峯張柴六と。住持木工の名代ふ。木訥と喚做しく。沙弥一名参るべし。と定まけり。杜四郎も名家の子ゑれば。功を秘しく。這隊ふ入らまく欲せず。ゑれども陣館の門前まで。俱ふ色くべしく身装を。這小松村へ。住吉の枝邨るまで。那里の差配ふ由らざるとゑ。這故ふ村正を置ず只孟林寺の門前を。貪民八九名詣来く伴ふ立んとの。商量既ふ果れども。生口の二賊駝鳥太吹五郎を。俱ふ脚ふ刀瘡あまで。曳立まどもいくふせん。歩よりゑ紡ぐもあくぢまべ。他ものハ躰く筵ふ乗く。貪民們ふ辱せけり。恁而大家

孟林寺を立出く。酷暑を忍びくいそぎしかど。既ふ未の時候ふ至ぬく。二好木工頭職善の陣館へ来ふけまで。杜四郎ハ里人櫛工ものと俱ふ其門前ふ集合く居ま。當下峯張柴六を孟林寺の沙弥木訥。并ふ住吉の里長故老ものと俱ふ。告文を捧げ徜下ふ参りて。住吉ゑ櫛賈十三屋九四郎の弟峯張柴六ものを同宿しく小松の孟林寺ふ在り。昨宵件の寺ふ推入りく。両個の強盗ハ鐵屑鍛冶郎ゑ殘黨ゑく。低抗駝鳥太狸毛吹五郎と喚做ものを。搦捕りく。ゆくを。牽ゆく参上ゑ。と。ゑ上く。則告文一通と。照据の書簡を呈覧ふし。受合ゑ。生口の二賊と柴六里長ものを。廳の局の内へ召入まく。伏兵四五名をりく守らせけり。尓程ふ二好木工頭職善る。量義ふ越ふ獄ふ

たりけ伝。大和の旅客朱之介及連坐の罪人九四郎が妻乙藝乾児六市四摠爲の疑獄の虚実を定難く。屢朱之介爲を囚牢より牽出さるく。拷問の苦と緊しく責るとども。朱之介爲は素より知らぬと云ふ。皆只寃屈を叫ぶのみ。俱ふ羨伏せざりしかど職善ひとく思惑ひく。竟ふ本月の初旬ふ至りて。両個の間諜児をひく。大和の上市へ遣しつ。朱之介が那邸を探。落葉が女壻狡非耶。且他ら年来紛狀と。落葉が心術の好ゆと。那里人ふ因りて捞らせしふ其間諜児かへり来りて。ひそかる隨ふ告しかど。朱之介が上市ふて放蕩無頼の事の趣。且他ら前ゆも罪ありて。國の守ふ召捕まりを落葉が救ひ事の顛末。且這春ふ至りて。落葉ら朱之介の為ふ沙金と唐布を買せんとて。他ふ金子を多く齎しく京へ遣しつると

ふ其崖畧を知らまつかど。職善疑ひ半分解く。肚裏ふ思ふ。然らば那百九十餘金ら。落葉とやらんが朱之介ふ東西と買せん為ならと。是不良の財ふあらど。遮莫朱之介へ。今様と殺しつる。罪を償ふ所ら。知又舌命の鐵屑が。支黨ならどとふ照据るけまべ其罪の。輕重ら定むべくも。但九四郎の還るを俟て。敲かど知るべしあるべしと更ふ尋思をまつかど是より呵責の杖を禁めて。朱之介を牽出させど。就中乙藝ら。獄卒毎ふ勤らせて。摸稜の段ふ效ふのみ。其次の日。船積城藏を召とりたふ。城藏ら是より先ふ屢陣館へ召さまつかども。猶疾病ふ推托けて在りしふ今ら辯ふふ詞ら。躰く鼠七と俱ふ參つ職善則朱之介が所をりて。他と舊縁の虚実を問ふ城

藏を連累の罪を怕れて具に答へず。但云。曩頃の鼠七が亦
上に如く。那朱之介が。當春賣買の事より。賤父荷三太の
舗に來り。折々入船を俟とあり。姑且止宿せるに。共所
に小人を。他と相識に。況小人の兄桟太郎の妻黄金と。舊
縁あるべくもいつぞ。黄金の故郷に近江ゆく。荷三太が親族の。獨女を
いひて。迎合りくに。新婦を。いかゝ。朱之介と。舊縁のゆゑ。
皆是他が陳ぜる所。佯誰にそいなあと辯に儘しく稟者。
職善吟く點頭く。さぞあらんさぞあらん。曩に鼠七が答稟者
と相同じ。然ても彼者に所要るし。重ねて參るに及ばとく。鼠七
と共侶に。身の暇を取せけり。偖而三五日を經ぬる程に。是日孟林
寺に同宿の一少年峯張柒六郎通能と。呉服商を者。昨宵鐵

屑鍛冶郎が支黨に。二賊を捕獲らとく。孟林寺の沙弥住吉の里
長と俱に。件の二賊を牽して來く。訴まうと。職善則有司從
へく。正廳に着坐する程。惠嶋頼紀美とく。先伏兵をのそ。罪人未朱之介
とて。藝六市四揔を。囚牢より召出させて。並く局の内に在り。頼紀則孟林
寺の住持水玉と。峯張柒六郎が。連署の告愬狀を。うち開て。聲朗に讀む
と。一遍職善是を。果る時頼紀又今樣に。墨を。一通を呈覧。職
善みづから是を讀見て。先住吉の里長を。檐廊の下に召よせて。問ふ。今告
愬狀に由る。武功の少年峯張柒六郎。十二屋九四郎の弟なるよう。ゆえなる。遽
莫俺いまぐ九四郎に弟あるを。何ぞ。始より。ゆえ上ざるを。と。詰り
けり。因く里長答るよう。ある。這段い尚長ゆえ。又去の次の回に。

新局玉石童子訓巻之二上冊終